特別講演②

江馬家文書世界を生きた人々

岩崎鐵志

平成七年度の日本医史学総会が名古屋市で行われることになって、この実行委員会はその特別講演の統一的テーマを、尾張・美濃・飛騨三国の医史学史に関わることとされた。

右の観点から、美濃を代表する医史学的事実を取り上げるにあたり、近世近代を通しての医家、江馬家に関わることが提案され、しかもその演者に筆者が指名された。江馬家文書を使っての研究は諸先輩が着手されていることから、内心は忸怩たる思いが強いのであるが、長期間にわたり江馬家文書研究会に参加し、その過程で多くの学恩を蒙ったこと、また、支援してくださった方々への謝意表明の気持ちに駆られて、これを受けたものである。したがって、このたびは、江馬家文書を使っての研究成果を問うものではなく、江馬家文書研究の成果が見られるようになったことに関わった人々のことを述べて、筆者の微視的感懐をあらわすことにした。

江馬家文書研究の会合は現在も継続中であるものの、現在、筆者はこの会に長期欠席中でもあることから、会の事務局担当者遠藤正治氏からのこのたびの推輓と、標題の人々の業績を早いうちにまとめておくという示唆に対して、いささかなりとも応えておきたいと思う。その意味からいえば標題は「江馬家文書世界を生きた人々」の冒頭に、私にとっての、という言葉を付ける類いのものである。

江馬庄次郎氏は本家相続人として昭和四十四年に神戸から大垣に居を移していた。その後間もない昭和四十六年の暮れに、青木一郎氏の訪問があって、屋根裏に積まれた典籍や文書等を発見されたのである。

その報が蘭研の支部的集まりの「東海蘭学の会」に伝えられ、昭和四十七年十一月、江馬庄次郎・壽美子夫妻の御了解を得て、その会員有志による、江馬家文書の整理を手始めとする研究会が発足したのである（斎藤信氏稿、『江馬文書目録』まえがき。同、「江馬文書研究会」のこと、『江馬文書研究会の20年』所収参照）。

その最初の成果が『江馬文書目録』（昭和五十一年五月十五日刊）であり、次に、江馬家歴代への来簡を翻字し、注解を施して出版する研究作業を開始したのである。江馬家文書の柱ともいうべき書状、すなわち蘭学・漢学・医学・書画等の学芸に秀でた人々から発給された書状をまとめたものである。その成果が先に、『江馬家来簡集』（昭和五十九年三月二〇日刊）、後に『江馬細香来簡集』（昭和六十三年六月一日刊）となったのである。

前者の研究作業にあたっては、毎月一回その会場を準備し、かつ、一宮駅（愛知県一宮市）からの交通手段の確保に至るまで、濃やかな配慮を示していただいた、当時の「内藤記念くすり資料館」（現、内藤記念くすり博物館）の館長、青木允夫氏への感謝の念を最初に表明しなければならないと思う。

次に、江馬家文書を世に問う契機をつくった青木一郎氏と、これに応じた江馬庄次郎氏との阿吽の交遊、更には江馬家文書を活用された人々のうちから、安井広氏を挙げたいと思う。

『蘭学事始』の表現を借りるならば、この三人は、杉本勲・渡辺公敏・竹内幹彦の諸氏とともに、「みな千古の人となれり」と書かなければならない。しかしながら、これらの人々はみな、江馬家文書の世界で永遠の生を生きる人々なのである。他方、現在活躍中の研究者の業績について言及を敢えて避けたことも、本標題を過去形にした所以である。すなわち、「紙碑を建てる」という故中野操氏の言に倣い、その精神を汲む初めとして、江馬庄次郎・青木一郎・安井広三氏の著作目録を一覧に供することが本席の目的である。

一　江馬庄次郎氏について（配布資料参照、略歴・論文等四二点・著書等五点）

大垣藩医江馬家の資料が戦災をくぐりぬけ、今日に保全されているのは、江馬家歴代の尽力があったことは言うまでもない。更に今、江馬庄次郎氏の遺言を守って壽美子夫人により、ほとんど全ての資料が岐阜県歴史博物館へ寄託されたのである。

生前の江馬氏の見識は、研究会やその後の酒席のおりに見られたものであった（今日残された研究会メンバーの写真は皆、酒宴の姿を伝えるものであることから、史料批判が必要になろうと、当時から既に軽口が交わされていた）。

さまざまな話題に垣間見せる知見は筆者などには魅力的なものであった。配布資料の著作目録からも看取されるように、健筆家でもあって、批判精神の一斑は多数のエッセイの基調をなしているものである。江馬氏には、戦前のまさに恵まれた環境にて成長され、最高の教育を身につけられた人がもつ、ふくよかな良識というものを納得させるものがあった。しかも神戸という、世界に解放された都会育ちの人がもつ合理的思考もさりながら、江馬氏におけるその原型は、江馬蘭斎から江馬活堂に至る儒教的合理主義が育てた批判精神、また、近世身分制社会にあって方外の士である医家の、しかも蘭法医のもつ相対的な自由度を内包した家学と家庭教育から継承されたものにあると理解されるのである。

とりわけ最晩年の、しかも大垣市民病院に入院されたおりの対話でいつも感じたのは、次に掲げるようなエッセイの精神を揺曳している姿であった。そのエッセイとは、「『永眠』の論理」と題して、「郷土研究岐阜」第十号（昭和五十年十二月）に掲載されたもので、その要点を引用するならば、次の通りである。

「死」は貧富貴賤の別なくすべての人を訪れる。死ぬことを怖いと思わない人は少ないだろう。（中略）私のような信仰心のない者はどうしたら安心立命の境地に入ることができるであろうか。

其寝也有呼吸而死　　其死也無呼吸而寝

これは蘭斎が子孫のために書き残した教訓の中の一節である。拙訳ながらその意味は「寝るということは呼吸が

あって死ぬということ。死ぬということは呼吸がなくて寝るということ」である。

若いとき何となく読み過ごしたこの短い字句を、年とったこのごろ読み返して、どんな名僧智識の説教を聞いても悟り切れないであろう私の、死にたいする恐怖がうすらいでいったのは何故であろうか。人間は毎夜寝る。翌朝生きたまま眼をさますことができるという保証はどこにもないのだが誰も寝ることを恐れはしない。それならば死期が迫ったとき今度はもう二度と起きる必要のない眠りに入るのだと思って寝ればよい、と悟ったからである。蘭斎が、既にほどこす術もない病者の臨終に何度か立会って、せめて最後の心の安らぎを与えるのも医師としての務めと考え、この短いことばをそれらの病者の耳にささやいたかも知れないと私は思う。

東洋の儒教思想を根底に置きながら、その上に西洋の合理精神を積み重ねた蘭斎はさすがに「死」という恐ろしいものを、ただの十六字をもって「死」即「永眠」という論理で片付けてしまった。（後略）

江馬庄次郎氏の死生観についての根源は蘭斎にあることは右の通りであるが、その江馬蘭斎についての研究は、青木一郎氏によって学界に紹介されたものといえよう。

二　青木一郎氏について（配布資料参照、略歴・論文等百点・著書等十八点）

昭和四十六年一月の青木氏の江馬家訪問以後、先にのべたような経緯で、江馬家文書が公開されるに至ったのであるが、青木氏の関心の赴くところは、著作目録に見られるように、坪井信道（寛政七年―嘉永一年、享年五十四歳）の年譜的研究から進んで、岐阜県下の近世医師群像を明らかにするための調査研究に向うものであった。それゆえ、医師の業績と交遊とを資料に即して挙げるという手法をとったから、後学のものにとっては、その著作は資料集的な意味をもつという便がある。

青木氏の問題意識の向かう跡をたどって見ると、どのようにして江馬蘭斎（延享四年―天保九年、享年九十二歳）に到達

したのかということである。すなわち、坪井信道が誕生した年は、江馬蘭斎が前野良沢について蘭学を修めた年であり、はるか後学の坪井信道の道筋が江馬蘭斎のそれと交差する点があるかということである。

坪井信道が多くの苦難を経て、江戸深川で医業と教育に自己の世界を確立させて以来、坪井家先祖の供養料を江馬蘭斎を通じ、蘭斎没後は活堂を経て菩提寺（蓮華寺）に納めるという交りはあったが、医学上の交流を示す書状等はまだ発見されていないというのである（「大垣藩医江馬家と坪井信道」、『医譚』、第四六号、昭和四十九年）。

それでは青木氏にとっての江馬家とは何か。江馬蘭斎と坪井信道とは直接的な師承関係はなくても、坪井家の出自を示す美濃国での最初の蘭学者への表敬と、青木氏は理解されているが、青木氏の蘭学史研究のなかでは、初代江馬元澄・二代元恭蘭斎以下の江馬家歴代（三代元弘松斎・四代元益活堂と弟の元齢金粟・五代信成笋荘と弟の春琢）の医業とその門下生、つまり師弟関係を縦軸にした時間的展開と、それぞれの交遊関係を横軸にした空間的展開を追求できる可能性を、江馬家文書に見出だしたにちがいないと思われる。

坪井信道に関わる家系、弟子、業績についての探求という一つの分野は、緒方洪庵の歴史的意義へ連続する条件を内包しているものの、時代的には、江馬蘭斎の世界を探求することによって、蘭学成立の時点にまで溯りえたことになり、また、江馬家門人を介して美濃国の医業の展開を位置づけることができたものと思われる。

それゆえ、青木氏の業績のなかで顕著な点は、診察しつつ執筆しつつ、そのうえの社会的活動にある。それらは昭和四十六年の坪井信道顕彰碑の建立から始まって、昭和五十六年の小森玄良顕彰碑建立に至る建碑の仕事であり、展覧会裏方の準備であった（資料参照）。そのことである。また著作刊行のほかに多いのは、各種新聞への寄稿が目立つ。青木氏の晩年の仕事には、このような社会的な啓蒙活動もあったことを銘記しておきたい。

三　安井広氏について（配布資料参照、略歴・論文等四十点・著書等五点）

安井氏の医学史研究の前段には三河国の郷土史に関心を示し、考古学関係者との交遊があったと恵美子夫人はいう。学位論文等の医療関係の専門分野の論文を別にすれば、郷土史一般のなかから絞りこまれて、やはり地域にかかわる植物学者の伝記的研究に進まれ、それを契機にして医学史の分野へ踏みだされたのである。それは昭和二十二年の開業以後十年余の、四十八歳頃のことであるから、前野良沢・江馬蘭斎の蘭学習得の年代に相当する。

江馬家文書との関わりは、「東海蘭学の会」の会員として参加したことに始まる。初めに門人帖の翻字を担当され、次に蘭学者からの『江馬家来簡集』出版に参加されたのであるが、『江馬細香来簡集』出版には関与されなかった。安井氏の問題意識は学芸全般というよりは、もっぱら医学史に関わる点にあったかと思われる。

ところで、安井氏の医学史研究が中年以後に始まったということは、戦中戦後の体験者であることと無関係ではなかろう。戦争によって人生における様々な仕事の中断が余儀なくされたり、方向転換や新開拓にむかわれた年代であったろう。

このような経験と出発が医学史研究の中に色濃く反映している例は、安井氏の場合でいえば、晩年の労作である『西尾幡豆医師会史』全三巻の特別企画にあるといえる。

労作という所以は、安井氏自らが座談会記事の原稿作成をテープ録音から起こしているからである。これは大変な作業量である。まさに現在進行中の伊藤圭介日記（名古屋市東山植物園蔵）のうちの『瓊浦遊記』の翻字作業を自らされた例に通ずるものである。

安井氏における『西尾幡豆医師会史』の歴史的意義は、戦中戦後における医療活動に関する座談会記事をとりまとめることによって、戦争体験を総括したと見られる点にある。

この歴史認識はそれぞれの巻の「あとがき」、「医学史を学ぶの弁」（第一巻）、「七十年の生活体験」（第三巻）という随想に見られる。

「あとがき」では、歴史は過去のものではなく、われわれの一挙一動が現代史の歩みであって将来につながるもの、といい（第一巻）、「現会員の第二次大戦中の諸体験」を記録しておくことの重要性を指摘している（第二巻）。更に、准看護婦学校創設に触れて、その卒業生に韓国国籍の学生の存在意義を強調し、「彼女らが母親となってつぎの世代にも対日好感情を伝えてくれることを思えば意義深いことである」（第三巻）と結んでいる。

また、「医学史を学ぶの弁」では、「医学史は決して故事来歴を詮索ばかりするうしろ向きの学問ではない。そうした資料を現代に生かし、現代医学を推進させるためのものでなければならない」という。これは伝研時代に、岡西順次郎からレントゲン写真をみて既往症と現在の病状、将来への洞察力を養うことを教えられたからであると述べ、長年にわたり児童園児診察の校医開業医として、直面した生ワクチン輸入の社会問題を取り上げている。

かくて安井氏においては、日常の医療活動に触発されて強い問題意識をいだき、その歴史的考察をするという方法論によって、「七十年の生活体験」の自恃を言うのである。その一端がベルツ研究に表れていると思われる。ベルツ論文の翻訳やベルツの伝記研究の一環として、ドイツでの調査に何度か赴き、それをまとめた著書の校正を了え、その日は名古屋丸善から原稿用紙を買って帰宅後、日常の仮眠中の死去であった。

このようにみてくると、先述の伊藤圭介研究の仕事といい、このベルツ研究といい、刊行直前に逝去されたことには言葉がない。

しかしながら、先の江馬庄次郎、青木一郎両氏についてもいえるが、三人の仕事ぶりは、立川昭二氏が引用する西鶴の『日本永代蔵』の文章、「この人死光り」（「ちくま」、第二八六号、一九九五年一月号）という表現そのものである。すなわち、死の自覚を自然体として秘め、老いの楽しみを生きた人々と言えるであろうからである。

（静岡県立大学短期大学部）